

# 英語力を伸ばしている学校は どんな学校か

—GTEC for STUDENTSスコアの分析から—

根岸 雅史(関東、東京外国語大学)

加藤 由美子(ベネッセ教育総合研究所)

森下 みゆき(ベネッセ教育総合研究所)

岡部 康子(株式会社ベネッセコーポレーション)

# 授業評価の難しさ

- 1回の研究授業で英語教育の評価ができるか
- 研究授業の評価は実証的であるか
- 学校英語教育の成否を1回の研究授業で判断していいか

# 研究設問

- 日本の高等学校英語教育において、どの程度英語力が高められているのか
- その程度は学校ごとにどのくらい異なるのか
- 英語教育の成果を上げている高等学校にはどのような特徴があるのか

# 研究手法

1. 英語力の指標としてGTEC for STUDENTSのトータル・スコアを用いて、英語力の伸長の著しい学校を特定
2. それらの学校の英語力の伸長の有り様を技能ごとに分析
3. 異なった学年群を見ることで、伸びの傾向が特定の学年の傾向なのか、ある程度一貫した傾向なのかも調べる
4. 伸長の著しい学校の英語教育のあり方を資料やインタビューに基づいて分析し、英語力の伸びの要因を探る

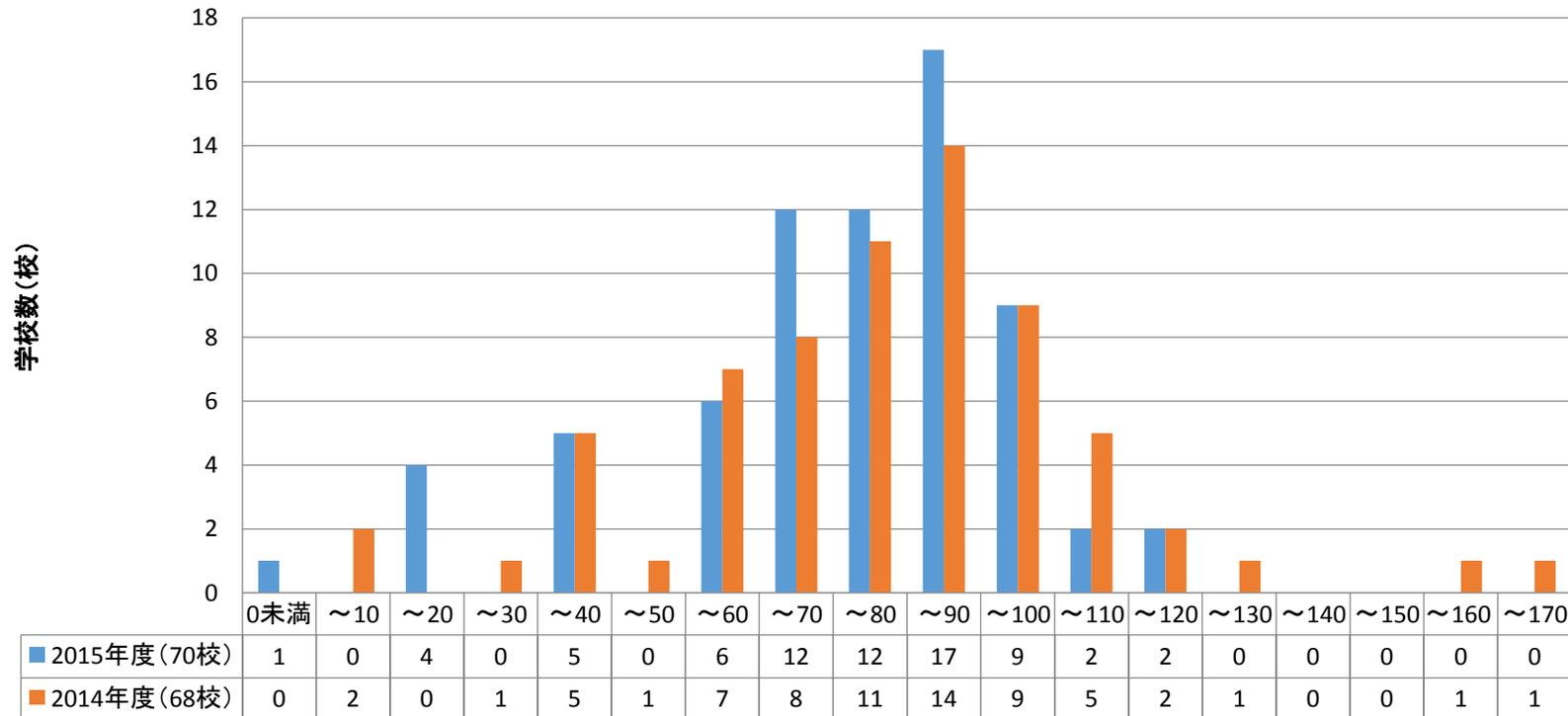
# 調査対象校

- GTEC for STUDENTSを学校単位で受験した高等学校のうち、1年次と2年次、または、1年次と3年次の2期間において受験している学校を調査対象校とする。
- なお、本調査では、小規模校の学校については対象外とし、受験者数100人以上の学校を今回の対象とした。
- さらに、なるべく公平な条件での比較を行うために、1) 受験人数の増減が10%以内、2) 学習日数が1年間または2年間±前後30日以内という条件で、学校を絞り込んだ。
- 前者の1年間の伸びを見た学校は2012-2013のグループと2013-2014のグループから成り、後者の2年間の伸びを見た学校は2012-2014のグループと2013-2015のグループから成っている。

# 結果(1):トータル・スコアの伸びの実態

- 伸びの平均(2015年度)は71.1。スコアを1、2年で100以上伸ばしている学校がある一方で、得点の上昇のほとんどない学校もある。

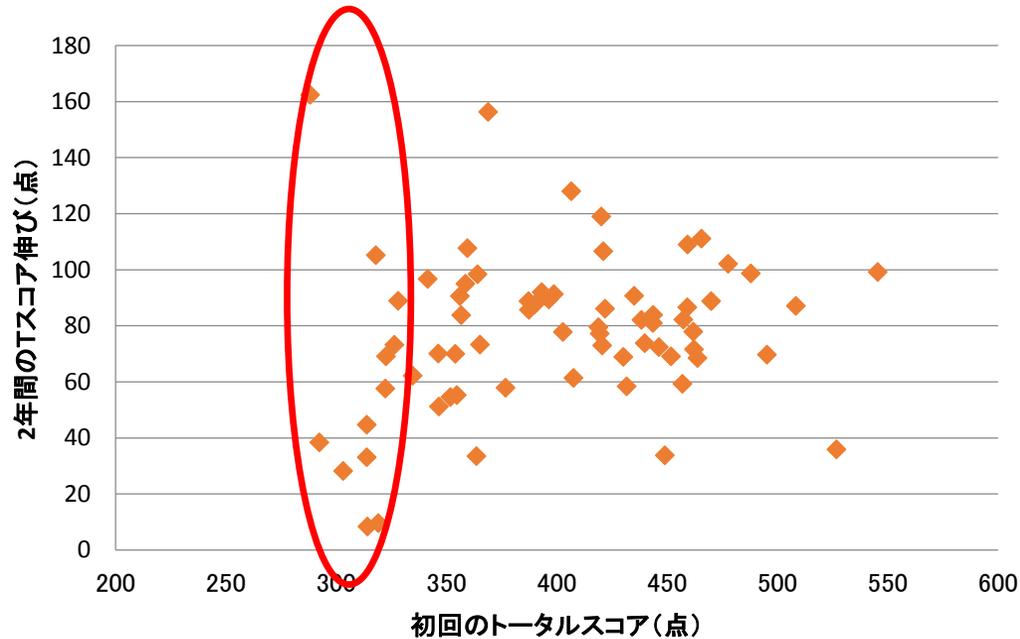
2年間のトータルスコアの伸び分布



# 結果(2): 出発点による伸びの違い

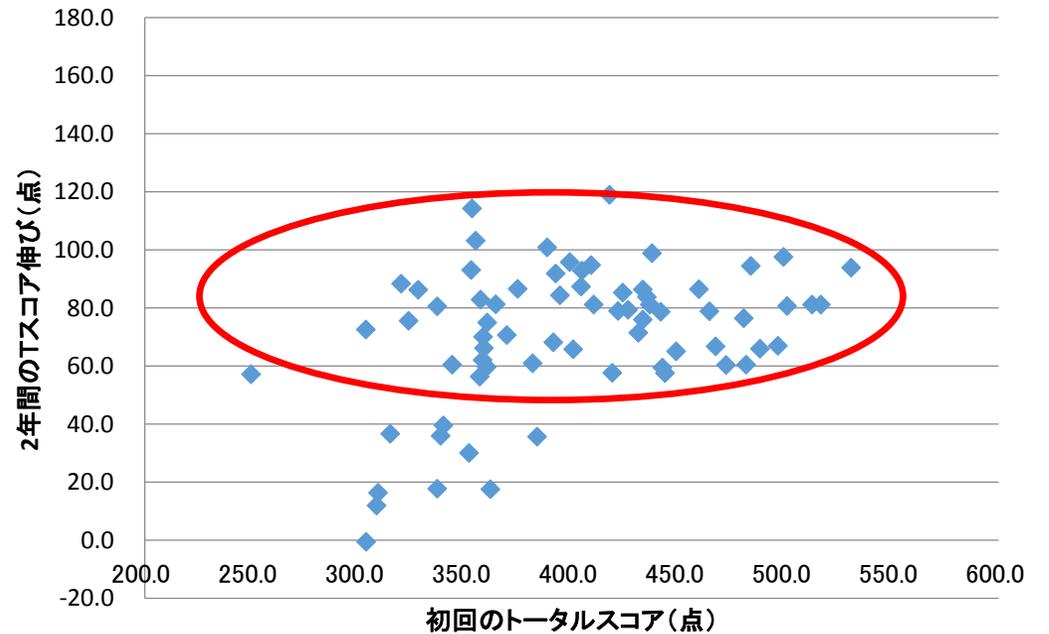
同じ300点からスタートしても、  
0点から160点の伸びの違いが

2014(H1夏、H3夏) 散布図



スタート地点がどこでも、  
伸びにはあまり違いはない

2015(H1夏、H3夏) 散布図



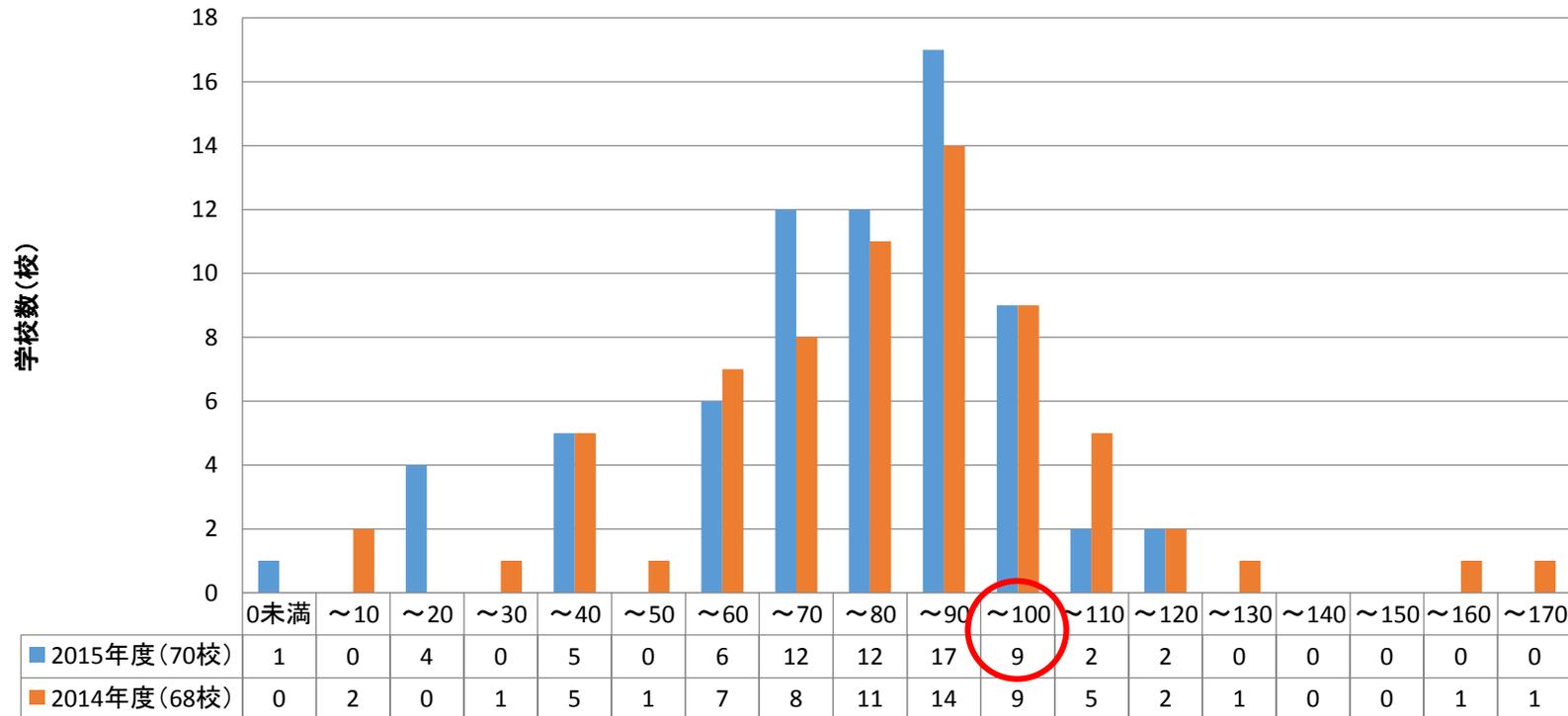
# 結果(3): 伸びている学校と伸びていない学校

- トータルスコアの伸びている学校
  - 技能のバランス: 3技能がバランスよく伸びている学校と伸びがアンバランスな学校がある
  - 伸びのパターンも様々
- トータルスコアの伸びのない学校
  - 一般的な特徴は、リーディングとリスニングはわずかに伸びているが、ライティングが落ち込んでいる

# 結果(3):トータルスコアの伸びている学校の抽出

- 伸びの平均(2015年度)は71.1。
- 伸び:A校93.1、B校94.5。

2年間のトータルスコアの伸び分布



# 結果(4):インタビュー(学校A)

- 学校全体の取り組み
  - 同僚性:目標(CAN-DOリスト)・指導法を共有、授業公開
- アウトプット:
  - 英語の授業は英語で
  - ライティング:まずはfluencyを優先
  - スピーキング:小さなスピーキング活動をちりばめる
- インプット:
  - リーディング:授業は概要・要点理解
  - リスニング:teacher talk+リスニング教材

# 結論

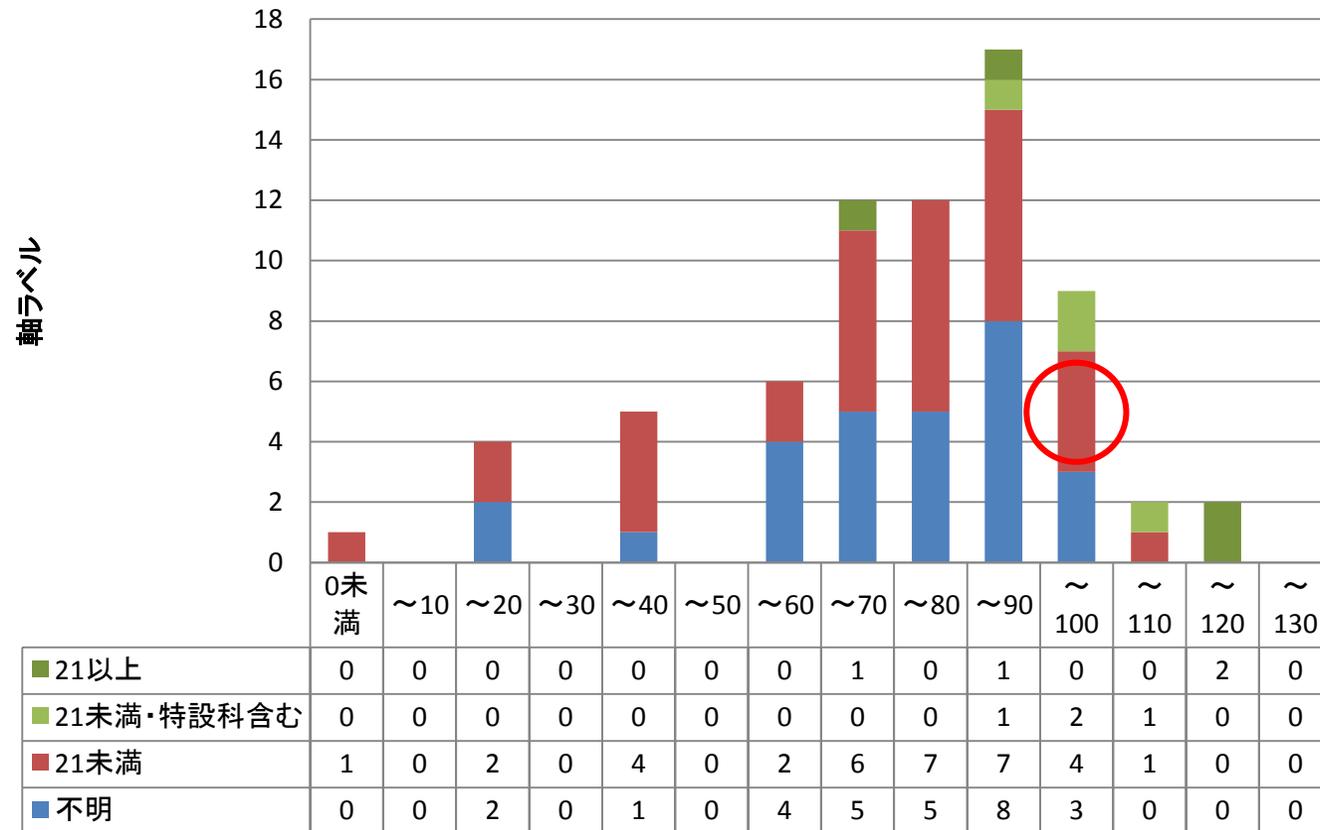
- 高校3年間の英語力の伸びには、学校間の格差がかなりある
- 英語力を伸ばす要因は、英語授業・英語学習の量と質
- 英語授業の肝
  - (実際に生徒が言語処理する)英語のインプットの量と質
  - (実際に生徒が言語処理する)英語のアウトプットの量(+頻度)と質
- 英語力を伸ばしている学校のさらなる分析→そのノウハウの共有
- 英語力を伸ばしていない学校のさらなる分析

# 結果(4):インタビュー(学校B)

- 学校全体の取り組み
  - 同僚性:目標(CAN-DOリスト)・指導法(ワークシート)を共有、和訳なし、科会が月2回
  - 全英連やSGHなどの外的な要因
- アウトプット:
  - 英語の授業は英語で
  - ライティング:まずは量を優先、継続的で頻繁なライティング活動
  - スピーキング:継続的なスピーキング活動
- インプット:
  - リーディング:授業は形を変え教科書を何度も読ませる、家庭ではGraded Readersの多読(2年間で20冊)
  - リスニング:多読により言語処理能力が向上か?

# 要因分析(1): スコアの伸びと授業時間数

2年間のトータルスコアの伸び(2015年度)・3年間の時間数



# 要因分析(2)

- 英語力を伸ばす学校の英語教育の特徴は、英語授業の「量」と「質」
- 英語に大量の授業時間数を充て英語力を伸ばしている学校がある一方で、授業改善などを通して「質」を高めることで、英語力を伸ばしている学校もある。
  - たとえば、3年間の英語の時間数が、私立、または、英語科等設置校などでは、25時間以上の学校がある。
  - それに対して公立の普通科では17－19時間ほどの学校が多い(文系の選択科目を入れて最大20前後)。
  - 公立で同じような授業時間数であっても、その伸びには大きな違いがあるケースもあり、それらの多くは、これまでに学校規模で様々な英語の授業改善につながる取り組みをしているところであることがわかった。